

様式(論)6

| | | | |
|-----------|--|---------------|--|
| 氏 名 | 大上 直樹 | | |
| 学 位 の 種 類 | 博士（学術） | | |
| 学 位 記 番 号 | 第5803号 | | |
| 学位授与年月日 | 平成24年3月23日 | | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第2項該当者 | | |
| 学 位 論 文 名 | 歴史的建造物に於ける軒規矩術に関する研究 (Study on eaves KIKU-JUTSU of Japanese historical architecture) | | |
| 論文審査委員 | 主 査 教 授 谷 直 樹 | 副 査 教 授 藤 田 忍 | |
| | 副 査 教 授 渡 部 嗣 道 | | |

論 文 内 容 の 要 旨

軒規矩術は古来より秘伝とされた建築技術であったが、江戸時代中期以降には版本本などが刊行されて広く知られるようになった。しかし今日文化財建造物修理で使われている軒規矩術法は昭和以降に成立したもので、中世や近世の真の軒規矩術法が明らかにされたとは言い難い。本論文はこうした認識のもと各時代の軒廻りの設計技法とそれらの変容過程を技術史的立場から解明するもので、第1～3編(序章、本章1～11章、結章)と補論2章から成る。

序章では研究の目的、歴史、方法の他、現代の軒規矩術法が昭和初期に成立したことを保存図の変容から指摘した。

第1編では中世の軒規矩術法について、「留先法」という仮説を導き出し実際の遺構を通してその妥当性を検証した。

第1章は中世の軒規矩が隅から定める「留先法」であることを桑実寺本堂他の実例を通して提示した。

第2章は「留先法」が二軒繁垂木の遺構において確認できることを165例の実例を通して示した。

第3章は「留先法」が一軒疎垂木、同繁垂木、二軒疎垂木の遺構において確認できることを42例の実例を通して示した。なお、一軒疎垂木の一部には隅ではなく平から決定していると思われる事例も確認できる。

第4章は「留先法」が扇垂木の遺構において確認できることを18例の実例を通して示した。

第5章は「留先法」が八角軒、六角軒において確認できることを江戸時代のものを含み6例の実例を通して示した。

第2編では十分に理解されていない近世の軒規矩術である「引込垂木法」について、大工文書や版本本等の書誌資料によって分析をおこない、近代へ変容する過程までを検証した。

第6章は最古の版本本の規矩術書である『大工雛形秘伝書図解』とその類型本による近世の軒規矩を分析し、その軒規矩が後世の「引込垂木法」と同じであることを示し、その設計工程を明らかにした。

第7章は近世の書誌資料(大工文書、版本本)が全て「引込垂木法」であることを検証し、『匠明』の枝割による軒出の表記が平の軒出を示すものではなく配付垂木数を示すものであることを明らかにした。

第8章は「引込垂木法」が『独稽古隅矩雛形』によって、隅木側面を基準とする「引込垂木口脇法」へと変容し、今日使われている「現代軒規矩術法」へ影響を与えたことを示した。

第3編では、中世から近世にかけてのその他の軒の技法について検証した。

第9章は、「留先法」によって隅の軒出が決められた後、平の軒出はどのように決定するか、その方法について4種類の方法があることを明らかにした。また撓込みが生じる理由についても示した。

第10章は、垂木勾配の決定方法と変容過程について検証し、「六ツ連」や「萱違い」等の技法とその変容について検証した。

第11章は、茅負の反りの決定方法とその変容について、タルミと茅負留先の勾配という2つの指標で各時代の軒形式について分析をおこない、その特徴と変容を論じた。

結章：以上から、我国の軒廻りの設計技法は、「留先法」⇒「引込垂木法」⇒「引込垂木口脇法」⇒「現代軒規矩術法」へと変化していったと結論付けられる。

補論では、本論文に関わる規矩の周辺の課題について論考した。

第1章では、西明寺本堂の前身小屋組が現在考えられているように五間堂当初のものではなく、七間堂に拡張されたものであることを復原図を作成して示した。

第2章では、数少ない中世木割書である小山家文書について紹介、調査した報告した。

以上、本研究では伝統的建築の軒規矩術法について幾つかのオリジナルの仮説を提示し、それを実証的に証明することが出来た。

論文審査の結果の要旨

規矩術のなかでも、日本建築の特長である軒の造形、すなわち、軒出、垂木の勾配、茅負の曲線を設計する軒規矩術はその中心的な技法である。規矩術に関する研究は、明治以降に行われた歴史的建造物の修理によって解明が進み、また1960年代以降、建築技術書の研究や公刊も進んでいる。本論文は、こうした軒規矩について今日知られている技法を再考し、軒廻りの設計技法と変容過程を解明するものである。

第1編では、中世の軒規矩術とその変容過程について、「留先法」という仮説を立て、実際の建物遺構

で検討し、この仮説が妥当であることを検証している。第2編では、近世の軒規矩術とその変容過程を実証するために、「引込垂木法」という仮説を立て、当時流布した『大工雛形秘伝書図解』などの書誌資料に当たっている。その結果、近世の軒規矩術は「引込垂木法」で説明できることを検証し、「引込垂木法」は「留先法」の欠点を解決した技法と位置付けている。さらに、幕末に著された『独稽古隅矩雛形』では「引込垂木口脇法」へと変容し、それが今日使われている「現代軒規矩術法」の基礎となったことを示している。

以上の研究により、平安時代中期から中世までの軒規矩は「留先法」で設計されていること、中世末ころに「引込垂木法」が現れ、近世の大工書はすべてこの軒形式となること、江戸時代末期に軒規矩を隅木側面に統一した考え方である「引込垂木口脇法」が出現することを明らかにし、日本建築における軒廻りの設計技法は、「留先法」⇒「引込垂木法」⇒「引込垂木口脇法」⇒「現代軒規矩術法」へと変化していったとの見通しを述べている。

本論文は、歴史的建造物の軒廻りの設計技法である軒規矩術について、いくつかの仮説を提示し、中世から近世にかけての変遷を実証的に解明している。申請者は、文化財修理の現場を経験し、規矩術を理解したうえで、本論文の作成に取り掛かっている。その着眼点、膨大な資料の整理、何よりも難解な規矩術を正面から取り上げ、新しい仮説の構築に果敢に取り組んだことは高く評価できる。

「留先法」「引込垂木法」の仮説は、多くの研究者や技術者による検証や批判を経ることで、より完成度の高い理論に収斂していくことが期待出来る。そして、日本建築の軒の設計、とりわけ歴史的木造建築（文化財建造物）の修復分野への応用が可能である。

以上により、審査委員会は本論文が博士（学術）の授与に値するものと認めた。